

複式学級の年間指導計画等(例)

1 複式学級における年間指導計画等について

複式学級においては、上・下学年の児童に対して学年ごとの学習内容を指導する方法である「学年別指導」を行うことにより、発達段階に応じた学年の目標や指導の系統性を踏まえた学習活動を展開することができるといえる。

児童にとっては、教師の直接指導の時間は少なくなるが、間接指導の場面で自主的な学習が進められるという利点も見られる。

しかし、教師側から見れば、二学年分の教材研究が必要となり、教具・学習資料の準備等にかかる時間も増えることとなる。また、授業においても、両学年交互に移動して指導していく「わたり」や指導段階を学年別にずらした組み合わせを行う「ずらし」の指導を行うなど、複雑で多様な対応が求められる。

そのような背景から、複式学級においては、国語科でも同一時間内に複数年の児童が同じ単元(題材・主題など)を用いて同じような学習活動を行う「同単元指導」や取り扱う教材が上・下学年ともに同一である「同内容指導」を採用する学校が多い時期もあった。

それは、同単元指導や同内容指導の長所として、次のようなことが考えられるからである。

- ・年間指導計画作成の作業が一元的になり、教材研究や指導の準備等もまとまった観点から行うことができ、学習指導の効率を高めることができる。
- ・共通の目標の下に学習が進められるので、児童が相互に協力し合う学習が多くなり、好ましい人間関係が醸成される。上・下学年の児童をまとまりのある一つの学習集団として形成することができ、学習活動に有利な条件

が生まれる。

- ・共通の学習場面が多くなることにより、学習経験を共有することができ、集団の思考の多様化を図ることができる。

- ・学習活動の大部分を共通のものとして進めるため、直接指導の機会が多くなり、教師が指導力を集中して指導の徹底を図ることができる。

しかしながら、最近では、次のような考え方から、学年別指導を行わなければならない現状にある。

- ・発達段階に即した指導の系統性を重視し、評価規準を明確にすることによって、国語科における資質・能力を着実に向上させるため。
- ・転校や統廃合に伴い、未履修の学習内容が出る可能性があり、保護者への説明責任を果たせなくなるため。

したがって、基本的には学年別指導を行い、学年の人数や実態に合わせて上・下学年の学習を関連させた指導を行うなどの工夫をすることが求められる。さらに、欠学年があったり、入退学者があったりする学校では、学習内容の未履修といった問題が生じることから、同単元指導や同内容指導は不適当であると考えられる。

ただし、学校の実状によって同単元指導や同内容指導の計画を立て、A・B年度方式で指導を行うことも考えられる。その際には、次のことに留意して指導する必要がある。

- ・クラス内の児童の間には、国語科における資質・能力はもちろん、その他の資質・能力にも個人差があることを前提として考えること。
- ・学習に対する興味や関心、意欲も、学年の枠を超えた個人差がある。そのため、教材の提示方法等について配慮すること。

- ・上・下学年の児童それぞれの学年に応じた発達段階を十分に配慮して指導を行うこと。とりわけ下学年の児童が上学年の教材を扱う際には、特段の配慮が必要となること。

- ・学習の系統性のうえで、単式学級よりも多くの異なった児童の段階があることを具体的に把握して、個に応じた指導と評価規準の設定に心がけると。

2 年間指導計画の作成の方針と教材配列

学習指導要領に対応した配分

二学年まとめで示されている学習指導要領の趣旨を踏まえ、二学年間の各領域の指導内容の配分を考慮した。各学年の言語活動例については、具体的な学習活動として記載した。また、「読むこと」の単元については、学習指導要領の学習過程に対応した四ステップを踏まえ、目的に応じて読み深めることができるように配慮した。

教科書の配列が原則

年間指導計画を作成する際には、教科書の単元・教材配列の順序が変わる場合もある。その場合は、発達段階を考慮し原則として下学年の配列を優先した。

学年別指導が基本

学年別指導を基本とし、共通の領域の教材によって内容構成を図っている。

- ・学年別指導を基本として、一方の学年に教師が「直接指導」として指示や発問を行っているときに、他方の学年には、「間接指導」として自ら主体的に取り組むことができるような言語活動を、適切に位置づけることが重要である。

- ・「A話すこと・聞くこと」「B書くこと」「C読むこと」の領域と「知識及び技能」の教材については、原則として全て学年別指導としている。しかし、学年の人数によっては、単元の一部を関連させて指導するような配慮が必要である。

- ・同単元指導や同内容指導を行う場合であっても、一年生の前期（十月初めまで・教科書の上巻）は、児童の言語経験と言語能力の実態を考慮して、二年生とは別単元の入門期指導を行うことが適切である。

- ・同単元指導や同内容指導を行う場合、一年生の後期（教科書の下巻）から、二年生との同単元指導や同内容指導になる。この時期はまだ、文字や語句の表現や理解の能力は二年生とは差があると考えられる。そのため、前期のうちから、同単元指導や同内容指導への円滑な移行ができるように、指導方法の工夫などについて十分な検討が必要である。

本計画例の配慮事項

学年別指導を基本とした指導計画であるため、一・二年、三・四年、五・六年という二学年ごとの目標や学習内容がわかるようにしている。なお、A・B年度による同内容の指導計画を立てる際には、「単元配当表」を参照し、指導計画例の指導事項から重点的に指導するものを選びながら再構成する必要がある。

- ・下学年と上学年、それぞれの学習内容を左右二段に並べて配列することによって、学年別指導を行う際に、その違いが明確になるようにした。

- ・各学年の言語活動例に基づき、それぞれの領域や教材の特質を踏まえた学習過程を想定して、学習活動を例示した。また、「話し合い」や「発表会」「討論会」などの学習活動において、クラス・学年の人数が極めて少ない場合には、複式の指導形態を工夫できるような参考例を示した。

漢字指導について

学年別指導における漢字指導は、単式と同じ形態となるが、教師が直接指導する時間は半減することになる。そのため、児童が自主的な学習を行えるよう補助的な資料・練習帳・ワークシートの作成と利用を心がけ、実態に見合う指導法を工夫することが望まれる。

なお、同単元指導や同内容指導を行った場合は、下学年が上学年の漢字を習得する場合が出てくるため、無理のないように調整することが必要である。

教科書の扱いについて

① 自主的な学習を支える教科書

複式形態の授業においては、間接指導時の自主的な学習を支えるために教科書を活用できるよう留意している。

- ・「読むこと」教材の主要な単元には、「単元とびら」を設けている。単元とびらには、これからの学習内容と、児童の「読みたい」という意欲を喚起する一文を示している。学習内容は「学習のてびき」の「ふり返ろう」と運動しており、児童が学習意欲を高めながら、文章を読むことができる。
- ・学習のてびきの「四ステップ構造」により、児童がしっかりと読みを深め、活発な言語活動が展開されて、自分の考えを形成できるようになる。
- ・本が読みたい、本で調べたい、と思っても、その本が図書館のどこにあるかわからなければ、読書活動にはつながらない。低学年から、図書館利用の方法をわかりやすく解説したり、多様な本の表紙とあらすじを学習のてびきと巻末付録のページで紹介したりしている。

・学習のてびきでは「自ら考え、表現する」学びを意識し、具体的な学びの観点を示している。そのため、児童の「何をしたらいいかわからない」がなくなる。

- ・教科書冒頭（一上を除く）には「〇年生で学ぶこと」を設け、どのようなことを学ぶのか、どのような国語の力が身につくのか、一年間の学習の見通しをもてるようにした。上巻の目次には下巻で学ぶことを、下巻の目次には上巻で学んだことを明示している。

・巻末の「言葉の木」「大事な言い方」を確かめよう」では語彙の拡充をねらい、学年ごとに異なるテーマで類型化された言葉が載せられている。学習のまとめや教材との関連学習などで活用し、語彙を増やしたい。

- ・必要なことは全て教科書の中に含まれているが、教科書の外に飛び出して、新しい情報を得られるよう「まなびリンク」を設けている。ウェブサイトと運動して、充実した情報にアクセスすることができるようにするなど、児童の「もっと学びたい」という思いに応えられるよう配慮した。

② 複式学級での扱い

教科書は、学習の進行や、クラスの実態に応じて適切に扱われるものである。とりわけ複式学級における少人数指導においてはその傾向が強くなる。そのため、単元を通じた指導の中の発展や補充という観点から、それぞれの指導において弾力的、意図的に扱われることが大切である。ただし、積極的に活用することで間接指導時の自主的な学習にも効果を発揮することが期待される。

3 利用上の留意事項

本計画例は、大きく次の二つで構成されている。

- ・複式学級年間指導計画（案）
- ・複式学級単元配当表（案）

「複式学級年間指導計画（案）」は、単式の指導計画をベースに、学年別指導に対応する形で作成した。項目としては「月」「時数」「単元名／教材名／教科書ページ／学習内容」★ここが大事／☆学習用語「領域」「学習活動」

「評価規準 学習指導要領との対応」で構成した。基本的には単式の指導計画の二学年分を、左右に並べて見る形となっている。

一方で「複式学級単元配当表(案)」は、同単元指導や同内容指導を行うときの参考となるように、A年度・B年度それぞれの年度の、それぞれの時期に学習されるべき教材とその授業時数を、左段にA年度、右段にB年度として一覧できるようにしたものである。したがって、学年別指導の「複式学級年間指導計画(案)」とは対応していないことに留意されたい。また、授業時数における「話すこと・聞くこと」充当時数、「書くこと」充当時数も掲げている。授業時数は、単式の指導計画と同じである。単式の指導計画の前書きの部分を参考に、実態に合わせて適宜修正いただきたい。

作成の際に留意した点、また、活用する際に留意すべき点は以下のとおりである。

① 「学習活動」の欄では、取り扱うべき言語活動例に基づき、授業の中で実際に取り入れたい学習活動を例示した。また、それぞれの学習活動は、学習の過程を意識して配列している。加えて、「※」の部分は、学年別指導の中でも、下学年と上学年が関わり合うなどして学習を進めることによつて、学習効果を上げられる可能性のある活動として、ポイントやヒントを提示した。

② 各学年の時数について

・原則的には、単式の指導計画に準拠した。学年による時数の差異は、一年生の三〇六時間と二年生の三一五時間の九時間だけであり、入学当初の欠課時数や特別活動等の時数として消化されることが想定されるため、特に調整することはしていない。

・教科横断的な学習を積極的に活用し、特に「書くこと」や「話すこと・聞くこと」においては、他教科や総合的な学習の時間との関連を重視した学習を積極的に取り入れることで、題材選びなどの効率化や実授業時数の確

保につなげたい。

・一年間に学習できる週数としては、四十週前後(平均的には四十一週)予定できるので、そこで生まれる余剰の時数は、補習や発展的な内容を扱う際の余裕時数として確保する。

・同単元指導や同内容指導を行う際の「繰り返し一案」の教材については、児童の実態を考慮して、学習時数を弾力的に増減するなどの工夫をすることが望まれる。

・「話すこと・聞くこと」「書くこと」に充当する時数については、()内に記した。

③ 児童の人数やクラス編成上の実態に合わせて、各校で指導計画を作成する際の手引きとして活用していただきたい。

④ 同単元指導や同内容指導から学年別指導へ移行する際(移行のための措置)の対応には、同単元指導や同内容指導と学年別指導とを織り交ぜて指導する。

〈下学年の指導〉

移行のための措置期間(第一年次)において、上学年の単元が配当されている際は学年別指導を行い、当該学年の単元が配当されている場合は、同単元指導や同内容指導を行うことが基本となる。

〈上学年の指導〉

移行のための措置期間(第一年次)において、下学年の単元が配当されている際は同単元指導や同内容指導を行い、当該学年の単元が配当されている際は、これを学年別指導として行うことが基本となる。